

市史しぼれ話

115

中央地区

中央地区という呼び方は、一九五四年(昭和二十九年)四月の一町九か村合併で成立した八日市場町の旧八日市場地区をそう呼んだことによります。

八日市場地区の前身・同町は、



本市の中心に位置する商店街

一八八九年(明治二十二年)四月の八日市場、富谷、竈部田、下富谷、米倉の五か村合併の際には福岡町でしたが、一九一五年(大正四年)十二月八日から八日市場町となりました。福岡町は二十五年余で消えましたが、合併の際にイ、ロ、ハ・・・の住居表示が取り入れられ、二十数年経た大正六年ころでも「八日市場町富谷」などの表記がみられます。

八日市場町が匝瑳郡の中心とされたのは、一八二七年(文政一〇年)ころからです。当時は村むらぎが連合して治安を保っていました。周辺四〇か村の中心村が八日市場でした。そうした歩みのもとに明治初年から郵便局、警察署、裁判所などの官公署ができた。当時は県下で有名な町に取り上げられました。

農業主体の近隣村むらのなかで、八日市場村は万町・見徳

寺境内にまつられる地藏菩薩(じぞうぼさつ)像が造られた二八〇年前ころから商家の屋号が見られるようになり、八十年後の一八〇七年(文化四年)には五〇余軒が増えました。その背景には、当地方で生産された八日市場木綿が江戸まで販路を拡げ、江戸との交流が生まれたことがあげられます。地藏菩薩像造立の寄付者には、近隣村むらはもとより江戸の町人もいました。

一八四〇年(天保十一年)二月の大火では、家数四二〇戸のうち約七割の民家と土蔵四〇ほどが焼け、幕末には富裕な商家は打ちこわしや真忠組(しんちゅうぐみ)騒動、明治初年の松山戦争などで略奪などの被害を受けました。

近年では国道バイパス周辺など市街地の変貌もあり、全国的に知られた植木生産地としての「八日市場」、伝統の祇園まつりも八日市場の名物となりました。

「八日市場」という地名は、記録の上では一四一七年(応永二十一年)ものが最も古く、これに対し匝瑳という地名は一二九〇年以上前から使われています。単純な年代の比較は意味を持ちませんが、市名として五〇年余を経た八日市場という地名には感慨もひとしおです。

(生涯学習課)